

「Differential Diagnosis of Colorectal Diseases」

東京女子医科大学消化器病センター講師 長 廻 紘 著

東京大学助教授
武 藤 徹一郎

著者の長廻紘博士は外国にも広く名の知られた一流の内視鏡学者であるばかりでなく、東大病理学教室で病理学をも勉強され、大腸疾患の病理に関しては一流の見識を持った若き学徒である。博士はこの2つの分野における一流の見識を見事に結合させて、ここにすばらしい1冊の本を生み出してくれた。この本は著者の前著である“大腸疾患アトラス”が土台になっていると思われるが、その内容は本書のほうが数段優れており、7年間の間に著者の辿ったこの道における進歩の跡、見識の深化が如実に示されている。

本書を手にとって先ず感じることは、そのずっしりとした重みと重厚な感触であり、中に何が書いてあるのだろうという期待を抱かせる、いかにも洋書らしい雰囲気を感じられるのである。簡単な anatomy と histology の記述の後に、著者が最

も興味を持ち、力を入れて書いたと思われる ulcerative colitis, Crohn's colitis 両者の鑑別疾患の記述が続く。内視鏡の写真が美しいのは著者のお家芸で当然であるとしても、切除標本、そして特に組織像の写真が完全と言ってよいほど見事なものである。病理組織像、X線像、内視鏡像、各病期の所見、鑑別診断が詳細にして簡潔に記載されているので、専門家のみならず初心者にも非常に参考になる。写真の数が多く、内視鏡所見と組織所見を対比してゆくだけでも大変楽しむことができる。

Ulcerative colitis と Crohn's colitis の後に infectious colitis, ischemic colitis, antibiotic-associated colitis などの炎症性疾患の記述とそれらの見事な写真が配されており、ページを追っていて飽きることがない。Polyp, cancer の記載が更にその後に続くが、この配列の仕方と本

書の内容からは著者の大腸炎症性疾患に対する情熱と自信のほどがひしひしと伝わってくる。更に39例の興味深い症例が、簡単な臨床的情報とともに提示されており、読者は美しいX線写真、内視鏡、切除標本、組織像の写真を眺めて、診断の自己テストを行うことができる。最後に内視鏡挿入法、biopsy, polypectomyなどの検査技術に関する簡潔な記述がある。

これだけの内容を満たす症例を著者自らの経験例から選んだことは驚嘆に値するが、この“my experience”に基づいた記載だからこそ、その内容に真実味と重味が感じられるのだろう。また、英語は極めて簡潔で読みやすく書かれているが、著者自らが全部を書いた由、その労作に心から拍手を送りたい。日本の症例を用いて、日本人の手で書かれた洋書がこのようにして欧米医学会にも登場するようになったことは喜ばしい限りである。

これだけの美しい写真の数々とその内容を考えれば少々お高い値段の方は気にならない。掛値なしに、大腸疾患に興味を持つ人々に推奨できる一級の本であると思う。

B 5 判 340 頁 図 24 写真 319
原色図 239 1982 年 ¥ 27,000 円 450

医学書院 刊